近江の古瓦 X 大津 4

「大津４」では浜大津から南郷まで、琵琶湖・瀬田川の西岸地域出土瓦について述べることとします。

大津廃寺については、江戸時代の地誌である「近江輿地志略」という本に、天武天皇の皇子である高市皇子や大津皇子に、縁深い寺院が現在の県庁のあたりにあったことが述べられていますが、その具体的なことは殆んどわかりませんでした。ところが、昭和52年に偶然京町通りの県庁前付近で古瓦が発見され、寺院の存在が裏付けられました。発見された瓦は数片でしたが、その中に四重弧文の軒平瓦があり（１）、瓦のつくりから見て白鳳時代の瓦として誤りのないものでした。そのほかにこれよりはやや時代が降ると思われる三重弧文の軒平瓦（２）と平安時代に属する唐草文の軒平瓦（３）がありました。しかしこれらの瓦を葺いていた寺院の遺構は不明です。

次に膳所廃寺ですが、ここには至近距離の間に白鳳時代の瓦を出す遺跡と奈良時代の瓦を出す遺跡があって、出土の古瓦が截然と区別されています。したがって、同一遺跡の広がりと見るよりは、二つの寺院が時期を異にして相接していたと見るべきではないでしょうか。古い方の瓦を出す遺跡は現在の滋賀大学付属校のあたりで、その出土瓦は近くの法伝寺に所蔵されています。軒丸瓦は複弁８葉で、蓮子は１＋７＋14、弁の周囲には１本の圏線がめぐり、外縁には鋸歯文が施されています（４）。これに対する軒平瓦は重弧文のものですが、四重弧のものと（７）三重弧のもの（８）の２種類があります。このほか、この地出土の瓦として「滋賀県史蹟調査報告第10冊」に２個の軒丸瓦が示されています。一つは国昌寺出土のものと同じ藤原宮式のもので、複弁８葉をとりまいて約40個の稠密な珠文帯があり、外縁ははっきりしませんが、かすかに鋸歯文がめぐっているらしい痕跡があります。蓮子は１＋５＋９です（５）。もう一つは特殊な文様のもので、複弁８葉ですが、弁の中に子葉がありません。蓮子は１＋６＋12です（６）。これらも白鳳時代のものですが、時期は法伝寺のものよりはやや降ります。いずれにしてもこの寺院跡で出土する軒先瓦はすべて白鳳時代のものです。それに対し、この遺跡の南方に奈良時代の瓦が出土する遺跡があります。軒丸瓦は複弁８葉のまわりにあらく珠文がめぐっており、蓮子も１＋５と数の少ないものです（９）。また軒平瓦では均整唐草文のもの（10）が出土していますが、これは平城京で見られるものです。確証のない単なる推測ですが、この寺院は「続日本紀　巻13」にある志賀郡禾津頓宮に当るのかもしれません。両遺跡とも寺の遺構は不明です。

近江八景で有名な瀬田の唐橋の西方の高地に晴嵐小学校がありますが、その校舎の前に近江国分寺跡の石碑が建っています。この石碑はもとはもっと東南の方にありました。寺跡は校地の東の部分よりさらに東方に中心があったようです。この寺は平安時代の初頭、それまでの国分寺が焼けたので、代って国分寺となった寺で、一般には国分寺とよばれ、付近の地名も国分となっていますが、最初は国昌寺という名の寺でありました。現在ではその遺構は全然わかりませんが、江戸時代にはまだ堂塔の基壇も残っていたようです。そ

1987．３．20
財団法人　滋賀県文化財保護協会

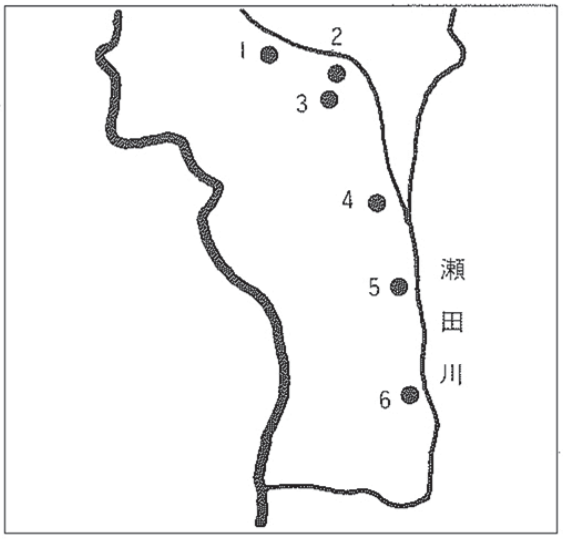
の礎石の一部は付近の西方寺の鐘楼の石垣などに使われています。出土瓦には国昌寺が白鳳時代に建てられているので、その頃のものから国分寺になってからのものまで、多くの種類が見られます。なお、現在国分寺の瓦として伝えられているものの中には、国分寺の瓦にまじって国分尼寺の瓦もあるようです。さらに奈良時代にこの付近にあった保良宮の瓦もまじっているようです。しかしこの保良宮や国分尼寺はその遺跡がはっきりしませんので、瓦を区別することは困難です。したがって、ここではこれらの遺跡のものを一括して国分寺跡出土瓦として説明します。

国昌寺が白鳳時代に創建されていることを示すものとして、大和の藤原宮跡で出土するのと同じ形式の一対の軒瓦が出土しています。軒丸瓦は蓮子が１＋５＋９の複弁８葉の周囲に、珠文約40個を連ねた珠文帯と鋸歯文縁があるものです(11)。軒平瓦は、上外区は珠文帯、下外区は鋸歯文帯で、内区は偏行忍冬唐草文とよばれる唐草文のものです(12)。ここで出土する白鳳時代のものはこの一対だけで、他はすべて奈良時代以後のものです。その大部分は湖南各地に見られるものと同じ種類のもので、瓦当文様も蓮華文軒丸瓦と唐草文軒平瓦が大部分です。その中で特殊な文様のものとして、湖南特有の飛雲文の軒先瓦の一対(15，24）と渦巻様の唐草文軒丸瓦（19）があります。飛雲文は弁数が12、飛雲は左行８個のもので、南滋賀廃寺のものとは少し異なるようです。蓮華文軒丸瓦のうち奈良時代のものとしては、複弁８葉で珠文の大きいものと(13)、単弁12葉で珠文が小さく鋸歯文縁のもの(14)が、平安時代のものでは、単弁12葉のもの(16)と単弁８葉のもの（17，18）のほかに、弁が線状に簡略化したもの(20)などが目につきます。唐草文軒平瓦では、奈良時代のものに、湖南地方では他に例を見ないもので、その文様の太さに特長のあるもの（21，22）があります。また線が細く、上下の珠文の小さいもの(23)は、軒丸瓦の(14)と対をなすものでしょう。そのほか、唐草が左右に四転するもの（25，26）や唐草が極度に簡略化されたもの（27，28）など、いろいろな種類のものが見られます。

石山寺は今も栄えている大寺院ですが、その創建に関しての文献が残っており、創建時の様子がある程度わかります。この寺院は古くから瓦葺ではなかったようで、出土の確実な軒瓦は境内の鐘楼付近で発見された一対の平安時代のものだけのようです。(29，30)。これは同様のものが崇福寺跡で出土しています。なお、同寺にはさらに古い瓦が所蔵されていますが、これについては出土の事情がはっきりしませんので、ここでは割愛します。

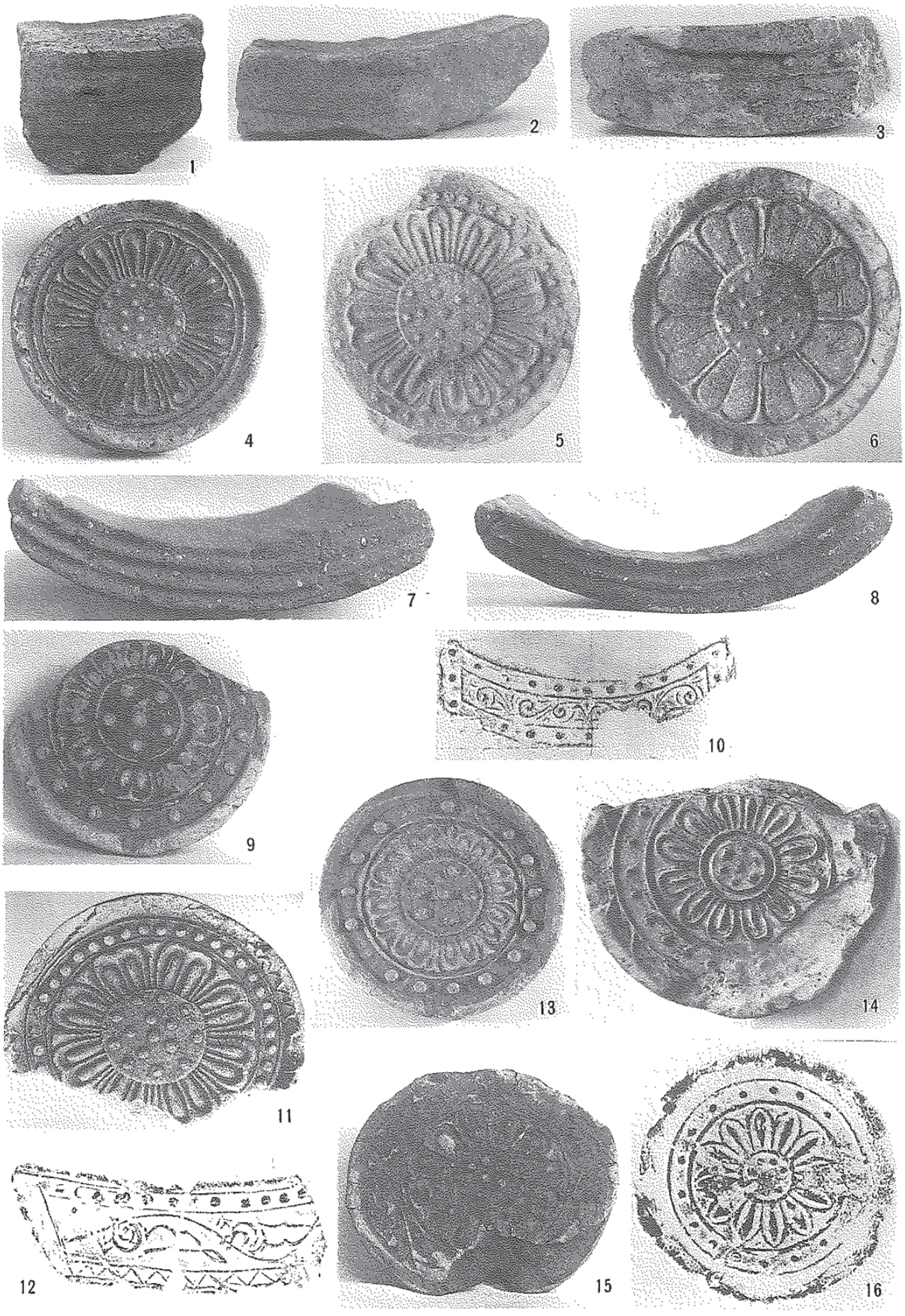
南郷瓦窯は近江国衙関係の瓦窯のようです。ここに示したのは、平安時代に属する単弁８葉の軒丸瓦(31)と、同じく平安時代の唐草文軒平瓦(32)ですが、軒平瓦のほうは、この付近では見かけないものです。このほか、鬼面文の鬼瓦(33）が出土していますが、これは奈良時代の終りごろか、平安時代初頭のものと思われます。

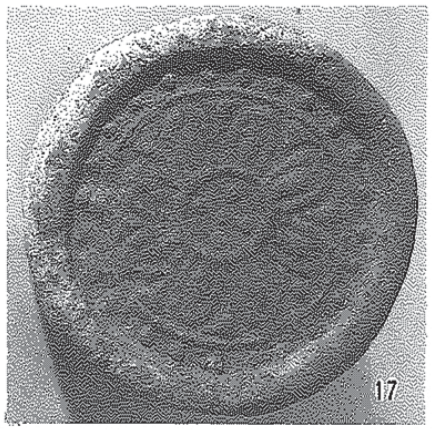
（西田　弘氏提供）

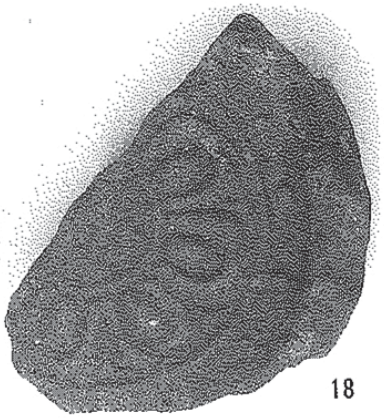


古瓦出土地位置図

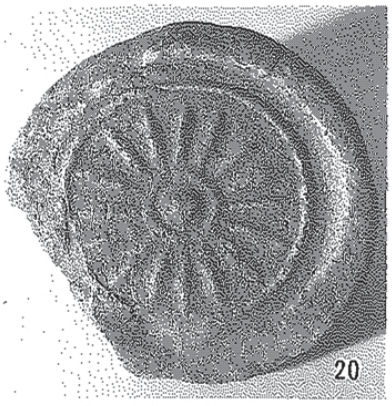
1．大津廃寺　　2．膳所廃寺(白鳳寺院)
3．膳所廃寺（奈良寺院）　4．国分寺跡
5．石山寺　　6．南郷瓦窯

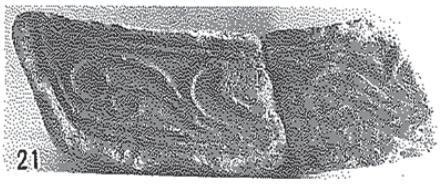

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16


17


18

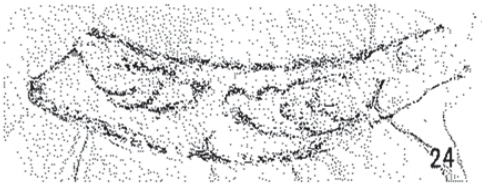
19


20

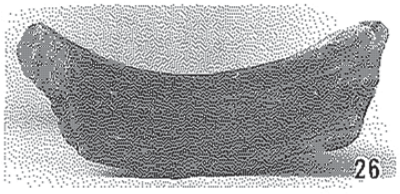

21

22

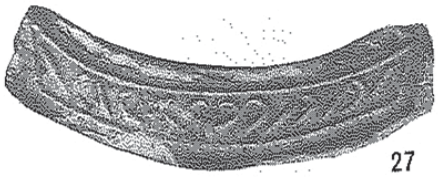
23


24

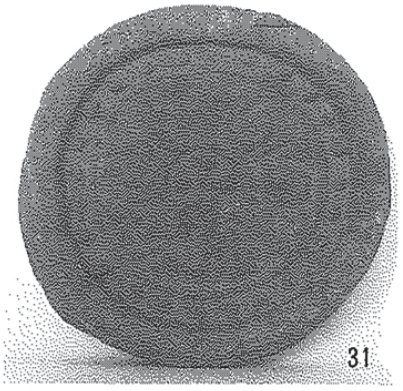
25

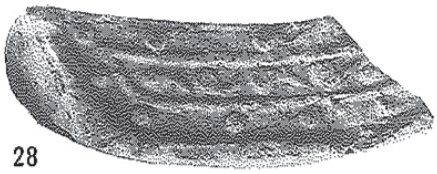

26

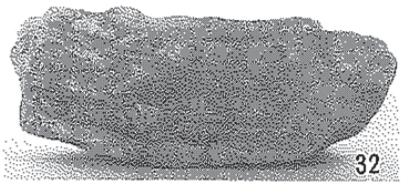
29


27

30


31


28


32

33

5．6．「県報告10」　16.19.23.25.27.28.「県報告５」
11.「湖都大津」各転載　13.17.20. 琵琶湖文化館写真

1～3　大津廃寺　4～8　膳所廃寺（白鳳寺院）
9．10. 膳所廃寺（奈良寺院）　11～28　国分寺跡
29.30. 石山寺　31～33　南郷瓦窯